

2026.09.20.

「ナルドの香油」

旧約 創世記 22章9～13節

新約 ヨハネによる福音書12章1～11節

1. はじめに

ヨハネによる福音書12章に入りました。次の12節からイエス様のエルサレム入城の出来事があり、受難週の出来事に入っていきます。今朝与えられているみ言葉は、受難週の直前の出来事、受難週に入る最後の出来事です。受難週はエルサレムにおいてイエス様が十字架に向かって歩のれた最後の一週間のことです。ヨハネによる福音書は全体で21章ありますから、ほぼ半分が受難週の出来事が記されています。最後の一週間だけで半分ですから、バランスは悪いですね。しかし、このことから福音書というのはイエス様がご受難されたこと、特に十字架にかけられたこと、そして復活されたこと、そのことを記すという意図・目的を持っていることが分かります。今朝与えられているナルドの香油の出来事は、これからイエス様が十字架に向かって歩み始めるための最後の備えの出来事、と言っても良いでしょう。マリアはそんなつもりはなかったでしょうけれど、イエス様は十字架に向かって歩みの最後の備えとしてマリヤの行ったことを受け止めてくださいました。実際、この時から六日後、イエス様が午後3時に十字架の上で息を引き取られました。そして、そこから遺体を引き取り、墓まで運んで葬るまで、残されている時間は3時間くらいしかありませんでした。というのは、イエス様が十字架に架けられたのは金曜日だったからです。当時の一日は日没から始まります。ですから、金曜日の日没から土曜日、つまり安息日が始まります。安息日になってしまえば、遺体を運ぶことも何もできません。ですから、イエス様は丁寧な葬りの時を持つことは出来ませんでした。アリマタヤのヨセフとニコデモという人があわただしく、イエス様の遺体を引き取り、亜麻布で巻いて、急いで墓まで運んで処理するしかありませんでした。今朝与えられているみ言葉は、そのような十字架の出来事を目前にした出来事でした。

2. マリア、マルタ、ラザロ、人それぞれ

1節から見てみましょう。「12:1 過越祭の六日前に、イエスはベタニアに行かれた。そこには、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロがいた。12:2 イエスのためにそこで夕食が用意され、マルタは給仕をしていた。ラザロは、イエスと共に食事の席に着いた人々の中にいた。」とあります。先週、ラザロの復活の出来事後、イエス様を具体的に殺すことがユダヤ人の自治組織である最高法院(サンヘドリン)で決まったことを見ました。彼らはイエス様の居場所を見つけて、逮捕し、殺そうとしていました。11:57に「祭司長たちとファリサイ派の人々は、イエスの居どころが分かれば届け出よと、命令を出していた。イエスを逮捕するためである」とある通りです。そのような状況の中で、過越しの祭りが近づいてきました。イエス様と弟子たちは、過越しの祭りに参加す

る為にエルサレムの近くまで来ました。ベタニアという村です。この村には、マルタとマリアの姉妹、そしてその兄弟であるラザロがいました。11章でイエス様が復活させられたあのラザロの家です。イエス様は、その家に行き夕食をいただきました。多分、イエス様はエルサレムに上る時、ベタニアの村のこの家を常宿にしていたのではないかと思います。この時、姉のマルタは給仕をしていました。このマルタとマリアについては、ルカによる福音書にやはりイエス様と弟子たちがマルタとマリアの家に行きました時「マリアは主の足元に座って、その話に聞き入っていた。マルタは、いろいろのもてなしのためにせわしく立ち働いていた」(10:39,40)とありますから、この時もそのような様子だったのでしょう。これはマルタの性分のようなものだったと思います。そして、マリアはこの時「高価なナルドの香油」をイエス様の足に塗りました。この時、むせかえるような強烈な香りが部屋いっぱいに広がりました。そしてラザロは9節に「12:9 イエスがそこにおられるのを知って、ユダヤ人の大群衆がやって来た。それはイエスだけが目当てではなく、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロを見るためでもあった。」とありますように、イエス様によってよみがえらされたラザロを見る為に人々が来ていたくらいですから、イエス様によって復活させられたラザロは、何も言わなくても、何もしなくても、その存在だけでイエス様の力を証し、イエス様が誰であるかということを示し示しておりました。

ここで思われることは、マルタはマルタなりに、マリアはマリアなりに、そしてラザロはラザロなりに、他の人と比べようがない在り方でイエス様に仕え、イエス様を愛し、イエス様の恵みと力を指し示していたということです。ラザロはイエス様に復活させられたわけですから、その存在だけで、そこに居るだけでイエス様の力を指し示しておりました。改めて、言葉でも行いでもなく「ただ存在をもって」イエス様を証するラザロのあり様を、素敵だなと思いました。また、マルタはそういう性分だったのでしょう。イエス様のために様々な心配りをして、給仕をし、イエス様をもてなすというあり方でイエス様にお仕えしました。そしてマリアは高価なナルドの香油をイエス様の足に塗るというあり方で、イエス様にお仕えしました。三人三様のあり方で、イエス様に仕えました。その中のどれが優れているとか、御心に適うのかと比較したり、優越を付ける必要はありません。マルタはマルタなりに、マリアはマリアなりに、ラザロはラザロなりにです。私どもはみんな神様から与えられている賜物が違うのですから、神様のみ前で、イエス様にお仕えするのにも、他の人と比べたり、優越を付けるということほど神様の御心から遠いことはありません。

3. ナルドの香油

ここでは特にマリアがイエス様の足にナルドの香油を塗ったことが特筆されております。それはマルタやラザロに比べてマリアがささげたものが優れていたからではありません。そうではなくて、イスカリオテのユダがマリアがイエス様にナルドの香油をささげたことに対して、文句を言ったからです。それで、マリアの為したことに対してイエス様が庇うように言葉をかけられることによって、マリアの為したことは本人も気づかないほどの意味を与えられました。そして、マリアがイエス様にナルドの香油をささげたことが「美しい行為」として、今日まで伝えられることになりました。

た。それは、マリアの為した行為は「献身」だったからです。私どもが神様、イエス様に対して為す業において、献身ほどふさわしく、美しい業はありません。

ここで「ナルドの香油」というものについて、少し説明が必要でしょう。ここでは「**純粋で非常に高価なナルドの香油を一リトラ持ってきて**」(3節)とあります。1 リトラというのは、巻末の度量衡の表を見ますと 326 g とあります。300 ccの計量カップくらいの量を思い描いていただければ良いかと思います。そして、これの値段・価値がすごかったのです。イスカリオテのユダが「**この香油を 300 デナリオンで売って**」(5節)と言っています。1 デナリオンというのは当時の一日の賃金ですので、300 デナリオンというのは300 日分の賃金ですから、現在の貨幣価値に変換すると 300 万円程度という事になるのでしょうか。だいたい一グラム当たり一万円ですね。私どもは香水というのは知っていますけれど、香油というのはあまりお目にかかったことがないかもしれません。水ではなくて油なんですね。ナルドの香油はとても高価なもので、女性が器に入れて首から下げたりして、身に着けて貯蓄するのに用いていたと言われています。

この時マリアは自分の持っていたナルドの香油をイエス様の足に塗って、自分の髪の毛で拭ったわけですが、これはその場にいた人たちを驚かせる、突拍子もない行為でした。どのような思いでマリアはこのようなことをしたのか、正確なところは分かりません。他の福音書とヨハネによる福音書ではこの出来事が記されている文脈が違いますが、ヨハネによる福音書の文脈から考えれば兄弟ラザロを生き返らせていただいた、そのことに対しての感謝をマリアはイエス様に表したかったということではなかったかと思います。ナルドの香油のようなものは、私どもが知っている香水を考えても、このように 300 グラムも一度に使うことなんてありません。ほんの一滴づつくらいにしかならないものでしょう。それをありったけの 300g くらいを一度にイエス様の足に塗ったのですから、その匂いはこの部屋全体に充満して、いい香りなどと言えるようなものではなくて、むせかえるような香りで気分が悪くなるほどだったのではないかと思います。マリアのこの時の行為は、常軌を逸しているものだったとも言えましょう。しかし、マリアはそうしないではいられなかった。自分が持っている一番高価なものを捧げたかった。それによって自分の感謝を表わしたかった。「ささげる」とは、そういうことでしょう。

4. ささげもの

しかし、このとマリアの行為に文句を言った人がいました。イスカリオテのユダです。彼はこう言いました。「**なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人々に施さなかったのか。**」(5節)実に合理的です。この言葉を聞いて、「私もそう思う」という人もいるでしょう。私もそう考えるタイプです。だってお金は大切です。300 万円ですよ。これだけあれば、どれだけの人の腹を満たしてあげることが出来るでしょう。ユダの言うことに反論できる人はいないでしょう。これは価値あるものの使い方という理屈としては、全く正しいでしょう。しかし、ユダはこの時大きな間違いを犯していました。それは、マリアの行為を金額に換算して論じた、ただのお金の使い方として論じたということです。もし、この時マリアがイエス様にささげた香油が2～3千円程度のものだ

ったら、ユダはこんな文句を言ったでしょうか？きっと言わなかったでしょう。言ったかもしれませんが、それほど説得力のある話にはならなかったでしょう。300万円もするものだったから、ユダは黙っていられなかったのでしょう。また聖書は「**彼(イスカリオテのユダ)がこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではない。彼は盗人であって、金入れを預かっていたながら、その中身をごまかしていたからである。**」(6節)とも言っています。中々厳しい言葉です。要するにユダは貧しい人々のことを心にかけて言ったわけではなくて、自分の懐のことを考えてこう言ったというのです。弱い人、貧しい人々のことを考えているような振りをして、実は自分の懐のことばかりを気にしている。そんな人はいつの時代にもいるのでしょう。ふと、政治と金の問題を思い出してしまいます。

ではマリアはどうだったのでしょうか？マリアはナルドの香油がいくらの価値があるからもったいないとも、私の行為はすごいでしょうとも考えなかったでしょう。彼女にとって、ナルドの香油は自分が持っている物の中で一番高価なものであったに違いありません。しかし、だからこそマリアはこれをイエス様にささげたかった。自分持っているものの中で一番価値のあるものをささげたかった。マリアは献身したんです。その「しるし」としてのナルドの香油でした。神様に「ささげる」とはそういうことです。マリアはラザロをよみがえらせてくださったことに感謝していました。この感謝の思いを表わすのにどうすればよいのか？マリアはナルドの香油にしました。ここで、マルタもラザロもマリアがナルドの香油をささげることに對して、全く文句を言っていない。ナルドの香油は、きっとマリア・マルタ・ラザロの家族にとってかけがえのない蓄えだったのでしょう。そして、それをマリアがイエス様にささげることをマルタもラザロも良しとしていた。「ささげもの」というものは、神様・イエス様に対する感謝の現れですから、本来お金に換算することなどできない、してはならない、そういうものです。これをお金に換算すれば、必ず「私の方が多い」とか「少ない」といった思いが入り込んできます。神様と自分の関係だけのところに、他人との比較という余計なものが入り込んでくる。そうすると、「神様にささげる」という行為が、純粋に信仰の行為ではなくなってしまうのではないのでしょうか？ささげる、献金するという行為は、神様と私との間でなされる最も「聖なる行為」だと私は思っています。献身のしるしだからです。しかし、そこに他の人との比較とか、このくらいでいいか、といった神様と私との間に本来あるはずのない思いが生まれてきますと、これがささげる行為を汚してしまいます。例えば、しばしば日本的感覚として「相場はいくらなのか？」というものが献金においても頭をもたげます。しかし、この感覚ほど「感謝のささげもの」を汚すものではありません。私と神様との関係に相場などあるはずがないからです。私は牧師をしていて「いくら献金すればよいのでしょうか」と尋ねられることがあります。そのような時私は「5千円で結構、5千万円で結構」と答えることにしています。そうすると、尋ねた人はいよいよ困った顔をするのですけれど、それは仕方ありません。私どもの信仰は、どこまでも自分と神様・イエス様との関係ですから、感謝の献金もそれと同じで神様のみ前で決めなければならないものであって、牧師であってもそこに介入することは出来ません。

5. 思いを超えて意味が与えられる

さて、イエス様はこの時、何と言われたでしょうか。7 節「**この人のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それを取って置いたのだから。**」イエス様はマリアのこの行為を「自分の葬りのため」と言われました。マリアはそんなつもりは無かったのではないかと思いますけれど、実際、この後イエス様は受難週の歩みをされ、十字架につけられます。その結果、このナルドの香油をイエス様の足に塗ったマリアの行為は、イエス様の十字架の死を先取りした「葬りの備え」として、位置づけられ、2 千年の教会の歴史において忘れられることのない出来事となりました。イエス様はマリヤの思いを超えて、マリヤの為した行為に意味を与え、位置づけてくださいます。そして、愛するイエス様のために精一杯のささげものささげたマリアの名前は、自分の信仰の歩みの手本として全てのキリスト者に覚えられてきました。勿論、先ほど申しましたように、マリアのささげものはマルタとラザロのそれと比べられるべきものではありません。それぞれが、それぞれの在り方でイエス様と共に歩んでいけばよいのです。それをイエス様は私どもの思いを超えた意味を与えてくださいます。私どもが為す信仰の業は、ただイエス様を見上げて精一杯為していくだけです。それが中々立派である必要ありませんし、他の人からほめてもらう必要ありません。ただ、イエス様は見てくださり、全てを喜んで受け止めてくださいます。それが私どもの喜びです。

そして、イエス様は8 節「**貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない。**」とも言われました。イエス様はこれから十字架に向かって歩んで行くわけですが、そのような状況の中でマリアのしたことをイエス様はここで「自分の葬りのため」と位置づけられたわけです。一方、貧しい人はイエス様が十字架にかかって死んで復活した後でも、いつでもあなたたちと一緒にいるのだから、そのような人たちにはいつもあなたたちは対処していけば良いと言われたわけです。TPO という言葉があります。Time (時)・Place (場所)・Occasion (場合) の頭文字を取った略語です。私どもの信仰の歩みにも TPO があるのでしょうか。「その時、その場所、その状況にふさわしいキリスト者としての振る舞い、キリスト者としての為すべきことがある」ということでしょう。

6. 神様が先に

マリアはナルドの香油をイエス様にささげたわけですが、それはここの文脈で言えばラザロの復活の出来事に感謝してということになるのでしょうか。ここで大切なことは、マリアがイエス様に感謝してこれを行ったということ、つまりその前にイエス様の御業があったということです。この関わりの中でマリヤは感謝のささげものとしてナルドの香油をイエス様の足に塗ったわけです。私どもとて同じことです。その感謝の元に何があるのか、それは人によって具体的には違うかもしれませんが、しかし、イエス様の言葉を聞いて、あるいはイエス様の御業に触れて、イエス様を信じ、イエス様の救いに与った。それゆえ、感謝をもってささげるということが起きる筋道は同じでしょう。

先ほど旧約の創世記 22 章をお読みしました。ここには神様がアブラハムに与えられた一人息子イサクを捧げよと命じられ、アブラハムがこれに応じてイサクをささげようとしたときに、御使いが「その子に手を下すな。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが、今、分かったからだ。あなたは、自分の独り子である息子すら、わたしにささげることを惜しまなかった。」と告げ、アブラハムが見回すと、「木の茂みに一匹の雄羊が角をとられていた。アブラハムは行ってその雄羊を捕まえ、息子の代わりに焼き尽くす献げ物としてささげた」と記されております。この出来事は、旧約における最も深淵なる出来事と言われます。どうして神様はアブラハムにわが子イサクを捧げるようにと求めたのか？神様はあまりにもひどいではないか？自分にはこんなことを求められても、これに従うことなんてとても出来ない、そう思われる方もいるでしょう。しかし、この旧約における父アブラハムがわが子イサクを捧げるという出来事は、新約における父なる神様が御子イエス様を捧げるという十字架の出来事を指し示しています。これが分かりませんと、イサク奉献の出来事の意味は分からないでしょう。

つまり、私どもの信仰の歩みというものは、私どもが神様に何をささげるかという前に、父なる神様が私どもを救うために最愛のわが子を十字架の上で捧げられたという出来事があったということです。マリヤがナルドの香油を捧げた出来事は美しい。私どももマリヤのように美しく歩みたいと思う。しかし、その時私どもが思い起こさなければならないことは、まず神様が私どものためにご自身が最も愛する独り子イエス様を捧げてくださったということ。この御業が先にあるということです。神様が最も愛しておられ、最も信頼しておられる独り子、天地を造られる前からご自分と共におられた独り子を私どもに与えてくださった。この出来事に感謝するところに私どもの信仰があり、献身があるということです。この恵みの出来事をしっかり心に刻んで、ただ感謝をもって為すべきことを御前に捧げて、この一週も御国に向かって歩んでいきたいと願います。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に満ちたもう全能の父なる神様。

今朝、ナルドの香油の出来事を通して、私どもに御心を示してくださり感謝します。私どもはあなた様の独り子イエス様の尊い血潮をもって一切の罪を赦していただき、あなた様の子・僕としていただきました。永遠の命をいただいて、新しい命に生きる者としてくださいました。まことにありがとうございます。感謝いたします。私どもの持っているものは、命も家族も富も全てあなた様が与えてくださいました。しかし、私どもはそれを自分の力で手に入れたかのように、自分のものであるかのように思い違いしてしまいます。どうか、あなた様に与えられたものをあなた様に捧げて、ただ感謝と喜びをもって御国に向かっての歩みを為していくことが出来ますように、聖霊なる神様の導きを心から祈り願います。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン